

中野幸一著『うつほ物語の研究』

中島 尚

昭和四十六年十月、すでに中野氏は好著「物語文学論攷」一卷を世に問うておられるが、その序文において今井卓爾博士は、うつほ物語関係の論文がやがて別の一書にまとめられるであろうことを述べておられた。ここにその期待の書物が、A5判七三七頁の巨大な姿をもって現われるに到ったことを、博士号受領の慶事ともどもお喜び申しあげたく思う。

氏についていつも思うことは、その思考また書き物の整理された明晰さであって、この論集においても論旨は極めて明瞭であり、更に随所にまとめの部分を置いて、読み手の理解を確認させる形をとっている。

ここにまとめられた業績の素稿は、「国文学研究」「学術研究」「早大大学院文学研究科紀要」等に発表された二十篇に及ぶうつほ物語関係の論考であり、その中には、成立時代論や享受史、あるいは草子地の研究等、定評ある業績が含まれているのであるが、それらが今回、うつほ物語の総合研究という意図のもとにゆきとどいた手入れを受けて按配・配列されており、まずわれわれはその力技に驚嘆させられる。これはすでにそれほどやすい仕

事ではない。

右にふれたように、本書にはすでに著者自身による周到なまとめの部分があるので、その紹介もいかかとはばかられるのであるが、以下、その見どころ等について紙数の許すかぎり申し述べさせていただく。

本書は、うつほ物語研究の現況を背景に総合的な研究を推し進めるとの見地から、前提・基礎・内容・影響の四方面を骨格に据え、八章にわけて整然と論述を進める。

Iは前提作業であって、「現存うつほ物語とその原形」のタイトルのもと、古代うつほ物語の本文と内容・現存うつほ物語における脱落と後補の二章を収める。ここでは、結論として、現存のうつほ物語には多少の損傷があるが平安時代の本文と内容をなお伝えていることをまず確認している。特に第二章の現存本において推定される脱落の個所の指摘は、実に一四〇にのぼるデータをあげており、精細を極めている。氏はまたここで、絵詞の部分が本文の純粋性を疑わせることを述べられ、物語本文と同時に成立ではないことを指摘されるが、これはⅣの七章における絵詞の論への足がかりを作られた立論となる。

Ⅱの「うつほ物語の成立時期と作者」は基礎論としてであるが、ここには定評ある成立時期の論が整理され第三章となっている。外部徴証と内部徴証という二つの柱を駆使し、特に内部徴証では、歳事・史実・風俗から全十三項目をあげ、全巻の成立を円融帝天元以後、一条帝初期にかけてのほぼ十年間であろうとされた。氏は処女論文以来、何回かにわたってこのテーマにいどんで

これらのであるが、ここで提示された結論は樓上巻の成立になお若干の問題は残ろうが、おそらく磐石のものと評者には思われる。また、第四章作者像の論は、その単・複の別について、前半の「などて」の分布状況、構想・文体・和歌の面による検討を加えて、複数作者ではないとの結論を得られ、次に、今まではっきりデータをあげて述べられていたわけではなかった作者の性別の問題を、文体用語・描写表現・叙述内容の三方面から検討、男性であろうとの結論を出された。続いての作者の周辺についての検討は極めて興味ある成果であるが、臆測とことわられて「醍醐帝の延長の初年頃に生まれ、朱雀・村上・冷泉・円融・花山の歴代を経て、一条朝の長徳頃、およそ七十五、六歳で他界したか。」とし、更に兼家と近い関係、むしろ彼がバトロンかという見通しを述べられた。まさに新見であって、現在のうつつは物語研究の停滞状況を破る成果の一つと評価したい。同時にこの考えを提出することによって、当然、作者源順説に対する疑点をも提示するようになってゐる。今後、安易に源順論をうつは物語論にすりかえるようなことはおそらく出来なくなるであらう。

このようにⅠとⅡで前提・基礎の作業を終えられた氏は、Ⅲ「うつつは物語の創造と方法」で内容面について検討を加えられる。第五章構想と構造では、特に俊蔭巻と藤原君巻の原構想を出発点として、新しく全篇を前篇の三部、後篇の三部すなわち、三一五頁のまとめに従つて言うと、前篇第一部を俊蔭・藤原の君・忠こそ、第二部を嵯峨の院・春日詣・吹上上・祭の使・吹上下・菊の宴・あて宮。第三部を内侍の督・沖つ白波。後篇第一部を藏開

上・中・下。第二部を国譲上・中・下。第三部を樓の上上・下と分けられた。この分類はこれもすでに新見であるし、また、藤原の君巻が子女の入内による正頼一族の繁栄の物語であり、あて宮をめぐる懸想人は竹取物語の求婚者を意識しての十人であるという指摘や、俊蔭巻を独立したものとする研究者が、同様なケースとしての忠こそその巻をなぜ同じように考えないのかといった、気が付けばほんとうにその通りだとわれわれを納得させる発言があつて啓発させられる。しかし、大部のうつつは物語の構想・構造を説くには、なお各部分の検討が必要であらうと思われ、この部分が、この充実した著述の中ではもっとも手薄なのではないかと、望蜀の思いを禁じ得ない。次の六章表現と方法では、まず一に叙述の方法と題して「かくて」の多用とその性格以下二項を立てるが、たとえば「かくて」の用法について、承接関係の稀薄な二つの文章を結びつけるためのものが多く、これは栄花物語にも見られるのであるが、これについては「長編構築を旨とする時間的意識の方法が、『栄華物語』の編年意識に発した方法と、叙述形態の上で期せずして一致したと見るべき」であるとされた。秀れた洞察であると思う。次の二の草子地の論は、これは氏の研究において定評あるフィールドであり、草子地の六類（説明・推量・批評・強調・省略・伝達）の内、初步的な説明の草子地が多いことを実証、更に省略の草子地は、吹上巻以後に現われるという前人未踏の見解を導かれた。三の長編構築の方法について物語包摂法以下の七分類は、評者などの興味のあるところなのであるが、その整備された分類の項目を論述するに十分な紙幅が必要な感じがし、ま

た、長編形成の過程でこれらの分類された方法が明確に作者に意識されていたと考えられるかどうか、なお今後の検討にゆだねなければならぬとも思われたことであつた。

Ⅳの「うつは物語の享受と伝来」は、影響の論で、これも氏の長年手がけておられる分野であるが、この内には、枕草子と源氏物語におけるうつは物語享受の様相の比較を通して、無心の絶対的な享受と批判的享受の二面を見られ、源氏物語における批判的享受が紫式部日記に見られるような大斎院を意識した態度とかわりがあるかと考えられ、うつは物語を大斎院方の物語と見なし得る可能性に言及された個所が目立つ。これは大変に興味ある提言である。また、うつは物語の影響においては、源氏物語以後の作り物語と中世の擬古物語を対象に細かく検討され、総じて仲澄の話の引用が多いことを突きとめられ、これらの影響は絵巻や改竄本を通してかと考えられた。このあたりは氏の独擅場の感がある。三の絵詞では、うつは物語に独特な絵詞の性格を「絵巻を模写する際に写し手によって模写絵巻の各々の構図に情景の再現を意図しつつ施された説明である。」とまとめられ、更に、物語改作の風潮の中に問題を問われ、絵巻解説のための読本用としてのうつは物語が、もはや原物語そのままであつたとは考えられないとして、絵巻に合わせて作られたその解説用うつは物語の存在を考えられた。第八章伝来には中世におけるこの物語伝来の状況と、俊蔭巻の略本かと思われる著者架蔵の一本の翻刻がのる。前者でもそうであつたが、資料の公開はたいへんにありがたい。

付篇の前に結語を置くが、この中に人物論を多年心がけておら

れるという文言が見える。そのすみやかな公表を期待してやまない。うつは物語において、本格的な作中人物論はほぼ皆無に近いのであり、これは研究の停滞を意味するとともに、何か人物論に対して研究者の興味・関心をそそらない何らかの事情がこの物語にはあるのだと評者などは考えている。

付篇として、Ⅰ断片資料とⅡ研究文献目録をのせる。断片資料はうつは物語に言及している文学作品・記録類三一種、古注釈書類七二種、近世隨筆・雜篇・その他六九種にのぼる巨大なデータである。同種のものは既にあるが、次の目録とともども何種類あつてもいいものと評者は考えている。

以上、なさずともよいあげつらいの度がはなはだしい部分もあるし、何よりも些細な部分にこだわりの大局を見通せない評言によって、あたかも大著に罪を得たが、これで、野口元大氏の同名の著と並んでこの物語の戦後の研究の総決算が出そろつたことになり、今後の研究の指標となることに疑いはない。ご労苦に對し心から感謝申しあげたいと思う。

最後に申し述べるのは失礼にあたるが、前著とともに、題字は御父君の染筆という。著者こそはまことに孝の子の至極なる者。この芸文の家にますますの筆硯の榮えあらんことを。

(昭56・3 武蔵野書院刊 A5判 七三七頁 一五〇〇〇円)